



地球と人との やさしい暮らしは 人と人との関係づくりから

特定非営利活動法人循環生活研究所 理事長
木村 真知子 氏



— 団体の事業内容と理念について教えてください。

「たのしい循環生活」を合言葉に、生ごみコンポストの利用普及をはじめ、身近な有機物の堆肥づくりや堆肥の還元農地となる菜園活動をしています。自宅でコンポストに取り組み、堆肥を使う人を増やすことを頑張ってきましたが、広がるにつれて都市部特有の需要（生ごみを減らすためにコンポストはやりたいが、自分では堆肥を使わないなど）も見えてきたことから、地域単位で循環させるコミュニティコンポストの普及にシフトしてきました。お金さえあれば一定程度欲しいものが手に入る便利な世の中になっても、環境も健康も様々な課題がある現代社会で、改めて堆肥づくりを文化にしたいと思って活動しています。

地域に暮らす住民の方から行政、企業など多様な方々と日ごろお付き合い

していますが、団体として譲れないことがいくつかあります。一方で、環境というテーマは相手の立場や考え方もあるので、落としどころを探ることを大切にしています。

— これまでのお仕事で印象に残ったエピソードを教えてください。

福岡市に美和台という地域があります。高齢化率27%を超える地域で、自治協議会や公民館と連携し、高齢者を含む世帯を対象に「見守りコンポスト」を設置するといった取組に挑戦しました。よそ者として地域に入ったので、自治組織や関係者とのコミュニケーションを大切にしました。地域の思いを汲みながらやり続けることで徐々に信頼を得られた経験があります。

その後コロナ禍の中で、美和台のコミュニティ菜園をどう管理するかという話題が上がったそうで、先方からすぐ相談の連絡がありました。困った時

に声をかけてもらえるような存在になれてとても嬉しかったです。

ちなみに、何回か指導にお伺いしたあとは、地元の方々の力で継続的に運営されており、今ではその畑で出来た野菜が公民館で販売されています。

— 木村さん個人が大切にしていることを教えてください。

元々、動物番組が大好きな子どもで、自然と環境の仕事をしたと思うようになりました。以前に、別の組織で環境教育の仕事をしていた時から一貫しているのですが、相手を批判したり、正しいことを押し付けたりするようなことはしたくないと思っています。環境にいいからと押し付けるのではなく、楽しいから、心地よいから、と思ってもらうことが大事だと思っています。誰もが出す生ごみを、地球も自分も同時に豊かにするツールに変えるのが循環生活研究所（じゅんなま研）の取組ですが、その背景として、一人ひとりの多様な考え方や価値観を尊重して、丁寧にコミュニケーションしていきたい、そう考えています。

【聞き手：つな環編集部】



活動拠点となる三苦LFCコミュニティガーデン。ボランティアの方々と共に、様々な堆肥づくりや菜園活動を行っている。

木村 真知子（きむら まちこ）

自然環境教育やワークショップ運営の経験を経て、2016年からじゅんなま研の活動へ参加。コンポストアドバイザー養成や、コミュニティコンポストで栄養循環を実現するLOCAL FOOD CYCLINGのしくみ形成・普及を担う。生きもの好きな一児の母。